

金沢がん哲学教室

金沢大学医学生と
「生と死」を考える



絶望に効く薬： 希望の言葉(ライム)を紹介しなさい

平成25年度の金沢大学医学類5年生のがん緩和医療実習(BSL)では、スピリチュアルケア入門と題して、学生全員に「これまでに生と死を考えさせられた本、映画、詩、絵画、漫画、芸術や自分の体験などから、苦境を救う「希望の言葉(ライム)」を抜き出し、背景を含めて皆に紹介しなさい」の課題を与えました。この課題の目的は、死を前にして生じるスピリチュアルペインを意識し、それに向き合うにはどうすればよいのかを考えてもらうことです。

がん患者のスピリチュアルペインとは、がんに罹患することで自身の死を身近に感じ、自己の存在と意味が消滅していくことから生じる、無意味、無価値、絶望と表現される苦痛です。スピリチュアルペインは主観的な苦痛です。患者は自分自身でスピリチュアルペインを乗り越えようと苦悩しますが、独りだけでは困難なことも多く、

他者の支援が必要になります。医療者は、患者と共にスピリチュアルペインに向き合い、患者の苦悩を聴き、相手の気持ちを落ち着かせ思いを明確にさせる支援を行うこと(援助的コミュニケーション)が求められます。しかし、医療者にとってもスピリチュアルペインに向き合うことは大変なことです。

作家の柳田邦男氏が話すように、死にいく人と関わる医療者は、人間の様々な苦難、挫折、愛と憎しみ、生と死などについて語っている小説、寓話や神話あるいは映画、芸術や詩などに接し、人間の物語やいのちに響く言葉に関心持つ必要があります。人は苦境にあっても、頭の中の混沌や葛藤を整理し、自分の中で文脈を持った物語を作り表現できた時に葛藤から開放されます。多くの場合、言葉がその土台になります。



金沢大学附属病院
麻酔科蘇生科

山田 圭輔

- 【出身】 石川県金沢市
1991年金沢大学医学部卒業
- 【資格】 日本麻酔科学会 麻酔科指導医・専門医
日本ペインクリニック学会専門医
日本緩和医療学会 暫定指導医
ロゴセラピスト(日本ロゴセラピスト協会)



哲学的でない人間は究極のところ強くない

曾野綾子のエッセイ集「辛うじて私である日々」(集英社文庫、1987年)の帯に書かれていた言葉である。がん患者のスピリチュアルペイン軽減を目的とする「がん哲学外来」に取り組んでいる私は、まさにその通りであると膝を打ち、百万の応援を得た気持ちになった。さすが曾野綾子である。「究極のところ強くない」は「死を前にして強くない」と置き換えることができる。

人はがんに罹患し、死を意識すると自己の存在と意味が消滅するように感じ、自分を無力で無意味で無価値な存在と絶望してしまう苦痛(スピリチュアルペイン)に悩まされる。絶望から、すべての意欲を失って引きこもってしまったり、自分は被害者であると思いつき他者を攻撃するようになると、さらに人間性を失くしてしまう悪循環に陥ってしまう。このままでは強くありません。

曾野は最初のエッセイの中で、ビクトール・フランク

今回の課題である「希望の言葉(ライム)」は、漫画家山田玲司氏の作品「絶望に効く薬」からヒントを得ました。がん緩和医療実習初日の講義の中で、私は絶望に効く薬はどこにあるかと皆に問いかけました。答えは人の中にあるです。人を救うのは人しかいないでしょう。実習に参加した医学生の中にある絶望に効く薬を探し出し、各自の希望の言葉(ライム)として表現してもらいました。

実習初日の講義で、「絶望に効く薬」の作品の中から河合隼雄先生を紹介しました。河合先生は臨床心理界の大御所で、文化庁長官も務めました。河合先生は、「心理療法を行う上で一番大切なのは、私という人間である。私自身がある程度自分自身のことを知り、ある程度癒される体験を持ち、ある程度の安定性を持っていないと専門家とは言えないだろう。」と述べています。がん患者のスピリチュアルペインへの対応も同様で、医師(医学生)自身が、自分を含めた人間の生と死、癒される体験、安定性について考え学び、自身のレベルを上げないと向き合えるものではありません。

この冊子では、同級生がいろいろな希望の言葉(ライム)を提示してくれました。人の考えは様々です。冊子を見て

お互いに考え学び考えることができます。また、実習の発表の際に気がついたでしょうが、発表は言葉だけでなく、発表者の話し方、表情、態度、意志が、聴衆に大きな影響を与えます。援助的コミュニケーションの臨床も同様で、言葉だけでなく、医療者の態度や意志を含めて、患者や家族に伝わります。これらも含めて学び考えましょう。

医学生と「生と死を考える」実習は平成21年度から開始しました。冊子を編集するのは3回目になります。学生実習(BSLとクリクラ)は一年を通してありますので、私はいつも生と死を考える機会に恵まれ、医学生の発表から多くの考え方や言葉を学びました。継続は力なりです。自分のためにも医学生のためにも続けていきたいと考えています。

皆さんは金沢大学を卒業し医師国家試験に合格すると、医師としての研修が始まり、最初は検査、診断、治療(キュア)に専念することになるでしょう。しかし、心の片隅にケアマインドを持ち、臨床では医学だけでなく人間性や洞察力が求められることを、時々この冊子を開いて思い出して下さい。

この冊子を作成するにあたり、北陸がんプロの支援を頂いたこと、編集を手伝ってくれた原賢人君と飯田圭輔君に感謝申し上げます。

金沢大学医学生と 「生と死」を考える

ル(1905-1997)を引用している。フロイトは、オーストリアの精神科医で、第2次世界大戦時のナチスによる強制収容所の中で過酷な体験を余儀なくされた人間を記録した「夜と霧」の著者として世界中に知られている。大戦後は、精神療法ロゴセラピーを確立し、苦境にある人を支援する活動を生涯続けた20世紀の偉人である。

フロイトは「人生を価値あるものにするには、避けられない運命をいかに意味あるものとするかが大切である」と述べている。人間は死を避けることはできません。死をいかに意味あるものにするか、死までをいかに生きるかは、すべての人にとって非常に大きな問題ですが、人は元気な時にはそれらについて考えることは殆どありません。科学的で合理的な考えと実践に価値を認める現代社会では、死を前にした人間は無力で無意味で無価値な存在となりがちで、スピリチュアルペインに押しつぶされてしまいます。

死までをいかに生きるかを考える時には、科学的な考えよりも哲学的な考えが必要です。哲学的な考えとは人の生き方を論証に頼らずに、直感的、全体的に把握する柔軟

で繊細な力です。これにより、自分を客観的に空の上から眺める鳥瞰的な視点を持つことができ、冷静になって考えることができます。元祖がん哲学外来の樋野興夫先生(順天堂大学病理・腫瘍学教授)は1)Sense of proportionと2)Sense of humorが重要であると指摘しています。Sense of proportionとは、自分にとって何が一番大切かを見極めること、変えられるものと変えられないものを見極めることです。Sense of humorとは、苦境にあるにも関わらず生きることです。ほんの小さなことや短い言葉(ライム)が、苦境を生きる希望になります。

哲学的な考えは柔軟で繊細と述べましたが、これらの考えを受け入れて実践することは勇気のある強い行為です。しかし、人は日常生活のなかでは、哲学的な考えを忘れてしまいます。死を前にした苦境の中で、独りだけでは哲学的な考えを思い出さることができない時があります。がん哲学外来とは、医療者と患者が対話することで、哲学的な考えを思い出させ、人間の強さを復活させる場所であると考え実践しています。



金沢大学医学生と
「生と死」を考える

